



葵太田集編上

中村俊定文庫  
文庫 18  
673  
1





世々の目より身をとり供の如く

産陽のくちん年比教又法の道  
之、字よハク自發ホク目メのノ後 盤 此老  
海函ウツ圖ズ西ホウ

上の世の道は皆由れども人の  
性中とのなきは是れ異あり  
只行人の心は随ふべきありは行は  
必ず之を思ふれば是れ由可し

行一如山の世の目よ八んへ道

一非  
あ作

後序



出きひ雪伸光所勺集二編ハ  
振るるもの主人心しんまれ席  
かこの筵よすを此シ識シ少のん  
とる所の松下り馬と運いの心  
す白無心檢尋精詳しと  
る形方のいゆる短繁るくを  
心とおふ心起る乃功を



天つち小綴集し日流の標的子  
 志寧のる世もこれ真を願念  
 新書シリス讀のしふて秘ありんそ  
 志寧の通志シリスつるんやと頻ヒシと  
 比らる木ハふら月寸あ士序イいと  
 くもの委しきしを多しきし結  
 りふ多しを電ニおわてニ電ニ対シ求ル

夢太句集 三編



雪太郎三路鳥纂シウ輯レウ

雪中菴完末校訂シウ

春之部

歳旦

志乃のやまに足ぬさし花のよ  
 くの難や日の梁も何ぞいふ  
 孫も何りそ孫もあし人 初鳥  
 とは見えれそとくはしはよ



井心の川持つまの心は乃嘉  
まきみん水いあを流ひさう  
たつあや清土乃白まうまう  
指のまき乃まき人まはまき  
初まじやまの徳ま秋の月  
まのまの徳まいきま初曆  
まのまのまままままま  
まままままままままま

十徳の何ままままままま

まままままままままま  
まままままままままま  
まままままままままま  
まままままままままま  
まままままままままま

先皇御集

礼徳や先ままままま  
元りや明ままままま  
ままままままままま  
ままままままままま  
ままままままままま



初春

破魔弓や的うきる納豆  
羽子の子や落葉の空に筑波山  
臨風や鶴尾いすし里の  
は好引や去り八木穂より金  
鞭の川に大鏡一輪也し  
想事や巴峽を巡るは糸水  
ささる半や今戸誠村より月  
はさる上もめし舞傀儡は

巴峽

前栽の山松葉  
と引子白川

さる

初子白川抱て弟も松山阿里

妙義詣乃 爽者上達

足付屋々足付屋々初子白

若菜 野老

君はあまきりやさる下りる系  
操女よ初る沙乃去り若菜  
少少女のいりりあまきり  
はあまきりさる山阿里

君はあまきり此の山阿里  
つむ我長中は雪崩つて  
妙依りさるをせり



送しよんきんてんかぐさる物  
芥つて千襟いしん何山  
きん玉おんあひん盤母ん

縣召 粥杖

一泊屋いぬ聲。おこ石  
粥杖い信連庵をい路い

梅

何きれ燈いしんあめいれ  
人きの日おん似い梅えい

場路や路い中い梅いん  
赤味いしん智のいんあを  
いめいしん古い梅いん松乃月  
おの梅いしんいんいんいん  
んいしんい初屋申い路い路の風呂  
木いんいあい夜ハいいいい梅

聖廟奉納

梅のつまき神乃心い

亀戸浄社



梅の香も心はくくも春のそよ風

梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風  
梅の香も心はくくも春のそよ風

大方君之銀山の業地社奉納之軸

神在るは好しおほく梅乃るは

香取法樂

梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは

芭蕉翁像前

梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは

鉦魔

梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは  
梅乃るは好しおほく梅乃るは



田家

鳴ちをほそめしきり鳴る梅えふ  
 六つ詠なまの心も揺るよこりしあ  
 葉まじりて馴れやしらるる宿

コ折夕  
音ル

鶯

了はまの流るる初言う好  
 常や十ねたるまの春はくり  
 黄鳥のこゝろは是れをこぼし  
 字久あやうつこ喜言る流るる星

水も解て流るるあも和之  
キユル頃そらのつせん

鶯や音成去る尾よ言や次  
 うそあや水よりつる二日月  
 常やあまの好るる京五山  
 うそは舞や歌のあはれ  
 常やいまこゝろを流るる月日  
 黄多中言る坊去る客時家

相根

うそを流るるけつる約う獄  
 白麻う其水よあまの流るる



鳥の子の卵を食して

頭芭蕉翁所持の水滴

うらじやそくくはねの硯

竹道く三代自免園印結ぶるを智

常々懐之世あつや 自由

うまは此敷の卵あつふぬお

常乃卵をふまぬまをうれ

若鳥やさくくは卵の部

能備馬楽

竹道題 一弄  
常のゆき子雲井の印

常ははらけけつうのがけけつう  
あふけつうはよ

常よまはけけつうのつを

巖

えんはあつてつをわね

松陰やあはけつう水車

之井さくはつうもつてつ

釋の画賛

海はあつてつをわね

瓶波菴



帆を巻く坂もあつた伊の海は

定まらぬ心より世の事をすて

断るして柳子乃子きよみ

小田原川里禪尼送別

此より終る門の扉は

春風

あつたこのるやれは連河

あつたあつた人となつた

まはる誰か裂し

あつた山のかきんは

香合の路

あつたやけも松のち

風中

子よあつたあつた

中務高送別

あつた風中七さつた

春月

あつた月の水と二月

あつた子孫身御す



大名の橋ゆく喜々やおもしろ  
わろしけんぢきよまはす水のみ

善村を悼

ちりり形よ山の端んより流る

業平胡弓の賛

おぼりのひらひらとて月

春雪

喜みささかしくもして程よし  
流るや鳥をらすくく父り親

流るよお都お路せらぬおの形  
妻のお乃まゝの書あゝ板屋か  
流るやわけのよおまゝえん子

小堀金井亭の茶

何のまゝやきんちから解く茶の縁

雪解

雪けけやうの影さびに夜

余をうらむ

小社より川おきこうと乃路の



春雨

清き目もさるふなるぬきおる  
出るくの人をわあ傘の下  
ふれ世あはれや海松の暗さ  
孤火もさるく春もあはれ

よせり御世はまじり

とまもあやまもつるも芳山  
暗き世様もつるしけふの雨  
刺さる人よ海松の雨

ふ姓のお某さふし春乃る

春水

源も柳をさるくまはる

若草 八十八の賀

こはつるもや八十八おより

父母の駿河の所別子原川の  
別業は括る各題を採る日本記を  
便以磯敷盧島お國中之柱而陽神丸  
旋陸神右ヨリ旋介巡國柱同會二面

美作やまの津も男もさし



物のまはり

いこのまはりまはりまはりまはり

柳

先登りまはりまはりまはりの柳は  
行はりまはりまはりまはり枯柳  
新湯まはり新屋の柳先はり  
まはりまはり柳先はりまはりまはり  
春柳や行はりまはりまはりまはり  
まはりまはりまはりまはりまはり

とちまはりまはりまはりまはり

まはりまはりまはりまはり

唐の柳は  
まはりまはりまはりまはり

まはりまはりまはりまはり

道のまはり柳の画

まはりまはりまはりまはり

馬士の恵り

まはりまはりまはりまはり



老木如柳三豹の贊

好やしらぬん 柳

柳の牛の画

呼中くは牛の梅あめ柳のふ

周帝乃画贊

青柳や想ぬ時乃美聲公

多柳や暖の地は唇くまら

陽炎

かき流つや先葉松の天窓を

猫逸

けめぬ顔や猫の意

焼きしつおまを猫の意

洗つおまを猫の意

美足す耳と知れぬこの意

白魚

ふ急や鯉も此花をん見

椿

ふおまを好く川をぬ花枝



初年

初年や命久しき祝賣  
まのややぬれん神の稻や  
は川さるほや賽名鏡磨  
初年やけふを結かり  
まのやや魚のたのめ  
初年や二の年笑ふ君乃妻

禅林

初年や此解方鞍小浄より

初年や名家より寺も有  
初年や名屋より正一位

大隠市

初年や大隠市

蝶

初年や白き袖も染あつ  
名はくも初あも我も  
三連なる悟氣なる小蝶  
初年の友はくもあも蝶



時一及時は〜おれおれ〜ぬ

雛子

しほおぬ雛子おぬま破の泣  
松山や片神鳴〜ぬまお声  
時言乃思ま凡き川〜ぬ

燕 序序 雲雀

乙多おお聲見え歩け都〜ぬ  
燕や聲見え〜ぬ掛続  
は〜や押〜里あ〜水の美

燕々〜ぬ〜ぬ〜二月〜ぬ  
をの〜〜小句〜の〜ぬ  
草お麦生お〜ぬ

お〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ  
柳を〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ  
ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

き〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

萱 菜花

し〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ  
〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ



今集上

小梅

草あはるともや南風とる影も

燒跡

初澄や燒やう末の松の月

蛙観

月乃もさく水鏡し啼かす向

川ヶ幸れぬ路や蟻乃坐禪石

木枕のおほよなるぬるる蟻

空想本場木よさくこころ江の蛙し

民形く日永あめ観計

春日

昔春宵短而起日高

起るぬおむつけいゝまの光

足利大日如来奉納

去りの意や蟻のまゝさく

雛

氏命雛や足る妹塔乃村の合

初娘の京花瓶に地を踏定めり

沙羅くまゝさくしれ母の籠

今集上

十五



高足乃内裏まゝの頂上の籠

翠見亭

籠拥の古き装束やと柳

出代

かゝるもや中流に散るの影り花と

熊野女

空代やを所新ら母のこ

桃

柳のこゝるみ井の林の如

里人や柳を映して是の年

道仙田一見 流る水の影をこ

呼吸の遠く里に津柳のこ

花

さゝらぬ花の友あり園西

と後人乃扇をくく花を空

二つを交はすも客やふはつ架

花鳥山

帆かけ船の影はよ花の影に似



た乃山挑行ハ誰ウまサ  
多クより鑑遊一花雨  
見あるハハ好くうまぬ  
のふ

山崎を道山  
山崎を道山

先りあれ西伝も誰花ハ誰

あゝ人の洛乃藤宿ハ中甚

く川もれや先サハくく智恩院

悉里故友のけ  
世の御を道

花多や日記も人男女又ま

文母ハ駿府ハ部を道

死いハく採り人守の花ハ

柳儿ハ藤

泊花本の中ハけハ採採ハ

新ハ藤ハ藤

昔ハくハくハ藤ハ藤ハ藤

芳植

何のハくハくハ人花ハくハ

山崎  
山崎



いふもちの舟花のしんせりし  
よけしとやしを言ひけり

鳥帽子山

花をやくらゝらちひは山

頭風鈴

風流のよのよの行路に

袴の帯持の髪

見えよめよめと花乃は詠宣

眠布袋鬘

此賦のよめ人なるとの候

三番叟髪

うねりしは花乃は詠宣

おと女の髪

面上の西湖ありと云々人表中高  
妙鏡の味

けしや笑顔の花乃は詠宣

三十番神奉納

当神乃や風流花乃は詠宣

嵐雪を忘る髪



阿のよもやわのりーヤ塚の花  
山くそんらゝゑのよまゐうらうれ

上野

おきまの葉ゝゝあれよまゝ

櫻

山乃端のさす枝よえとり初梅  
しゝゑの枝ゝり深き梅か

東嶽山六句

年くゝよ皆ら(おの)からん

はくゝあまおきりりんをえ門  
勅額よま井梅とんゝ自の取  
道かゝゝさゝゝゝなれあま  
臨却ゝ海雲はゝゝよ帰し  
人去て梅冠集乃月あれ  
父梅ゝゝ帯を頃魔の姿も

まき梅

まきあゝんゝあれあ初梅  
唇ゝも笛も吹くゝまねさゝ



七拍集擬古七変發句

貞徳乃頃

後庭一連路に接人生を祀梅

檀林の以

折りのいぢみぬ顔やハミ梅

次顔乃頃

白鳥の羽お年よふく白鶴は久し

虚栗の以

あゝお別る梅や君う歌大工

續虚栗のころ

歌うや纏もも是も梅川

未集記乃頃

ふきみさくら吐出さ見し年

岩依乃頃

古道よめらう逢ふまじら川梅

よみ乃頃

山くや君う梅ハ咲かう程

芳ゆき梅うきとあけの詞友を梅山



又とてやふ梅の落る明乃月

梅の亭

吾は月には蒼々たる梅ありて此亭子  
きしとありてはまよふ候りては  
こころのしづかにてはさかぬとて  
あはれなるの心はさかぬとて

とて咲けし君やまへんゆり梅  
庭のうらや江戸の櫻乃日枝庵  
梅よせし牡丹化し人あさくら  
若狭の水乃きりたよちり梅  
眞夢判者梅香

紙筆の人丸さらり咲り小

文彦君三周忌追善  
紙筆のしづかにてはさかぬとて  
梅のうらや江戸の櫻乃日枝庵  
若狭の水乃きりたよちり梅

君とてはれし人梅の霞は力

浪花のうらや江戸の櫻乃日枝庵  
梅のうらや江戸の櫻乃日枝庵  
若狭の水乃きりたよちり梅

水乃新しき如し山はさか

忘杖文彦  
伊豆山の梅乃日枝庵



を村群うらむるに面令せし外言既鳥  
しつう人の世にさしあはれし小娘く  
杖をさしあはれし小娘の礼をたて  
まはさしあはれし小娘の礼をたて  
秋深しけしけしけしけしけしけしけし  
とつらふをさしあはれし小娘の礼をたて  
解しけしけしけしけしけしけしけし

わき〜 鴻き〜 やをを志杖

おんやおんやおんやおんやおんや

名知〜 のさ〜 し〜 秀〜 橋

海棠

海棠や子〜 乃あ〜 新

苗代

自有感

苗〜 返り馬七四角以是も子

善成るお名をかく

苗代や門〜 宅田た〜 川

桑摘

桑外〜 平〜 如め桑つ〜 里

鳥巢

孝お巢の新〜 も卵〜 朝〜 月



春雜

六千賀

四つ子代のこゝろ

まふ丸老人七十賀  
又流舟よ芝若  
画せしよ賀

まふ七星城人魚し芝若うね

無患文うらな賀

鶯鶯さむし

仙舟の壬辰賀

先後く松う浦よ

文部初夢の賀

さつさや初夢の賀

初夢の賀

宝曳ヤうらな

悼月景

人まゝ母を侍乃睦月

浮世中の  
風流なるや

梅水余踏く柳半方丈



よーあつる門鼓きよ水鏡心  
味方うま

春おゆきを味方の草の枕ふ

二月のうらなふしは和を命作む

おー物成二りあ乃名綴ふ

白麻子

蓮をむく多抱新の夕日のは

花活は枝の枝枝のまうも画ふ

無指名あやや雀のえが一個

富土のあらふ木叶  
あまを志のま  
之保乃松をいさかぬき  
のゆり花はけく枝をきれし  
くも目むなる急ふ費し

木よ竹もよあやめをいさか  
接穂の

白麻雜髪

くらり〜と彼ら海をさすのてん  
あま

あまきうら抱捨の呪ふ  
あまをいさか

雪のけし程平うらまし  
あま

あまのあ〜いさか  
あまをいさか



雛扱よりいよしたまひし夜寝の神

徳君より下り我古稀の齡を祝ひ給ふ  
と云ふ御海し

菊苗や子もふはるはるはるはる

阿ふ人の子

子世極く二世ふみ菊のあふ

父母縁層より起るはる

水の流る一日拾り都る

子るこふ草よ花のあふ

田原中よの角拾よ地牛

控へ居や二方子拂て炉の石残

三月廿一日町人万句集

草まきよ山ひく日を都る

平家歌集

梅こりもし柳らる梅茶心世を

子布蕙波の吹れり柳子安井より對

むらきよはあふ夜の曉梅小

大津絵乃歌

振袖のすくはるはるの花



碧のうらみさしよ  
清のうらみさしよ  
白のうらみさしよ

神松やうらみさしよ

神松のうらみさしよ

暮春

春のうらみさしよ

春のうらみさしよ

白魚のうらみさしよ

春のうらみさしよ

蓼太句集 三編

夏之部

更衣

夏之部  
更衣  
山王のうらみさしよ



後臨く禱者志のふ給うぬ

郭公

我志事しの候なりしおぼせぬ  
そのまゝに名をくはる子親  
うめ侍人と扇なる何事か  
諸人よ侍く癒れぬおぼす  
杜若のつらきまきり 杜若  
何し其おほきこるおぼせぬ  
耳う地の介ふおぼせぬ 時多

をまきり母二羽えくろ 蜀鏡  
杜若のつらきまきり 杜若  
何し其おほきこるおぼせぬ  
耳う地の介ふおぼせぬ 時多

百書句合

をまきり母二羽えくろ 蜀鏡

山王法樂

本乃言く祭神やるん杜若  
若くは家あゝるおぼせぬ



後府修海寺

苔をまじりて夜半のこゝろに

得魚亭海内歌

けしきをくや磯のふりて

都をゆくはれをのりて

紅くまのりて

はらりて

るはらりて

月よけのてら女の一の画

五光のてら女の一の画  
てら女の一の画

并に花のてら女の一の画

藤原の長良のてら女の一の画  
同藤原の長良のてら女の一の画

杜のてら女の一の画

画工文流のてら女の一の画

てら女の一の画

西津禪寺のてら女の一の画  
おまのてら女の一の画



縁守を命のすししを記す書はわが心  
をよき事ししは世用のありしを記す書は  
時風を記ししは世用のありしを記す書は  
くつきのありしを記す書は世用のありしを  
しよのありしを記す書は世用のありしを

馬焼入書や  
子規

牡丹

はしはしと天府君のありしは

運の牡丹乃香や牡丹

初年付りしは又我々中にも自覚  
世に万府君の招きしは  
何れも是れを記す書は世用のありしを

流しまりしは

牡丹の牡丹乃香や牡丹

掃の牡丹乃香や牡丹

牡丹乃香や牡丹

芍薬も牡丹乃香や牡丹

杜若

新の牡丹乃香や牡丹

牡丹乃香や牡丹

牡丹乃香や牡丹



此の巻の巻所をよみては丹、二巻の  
の巻所をよみて

歌よも 峰乃 杜若

智阿尼の巻所をよみては丹、二巻の  
の巻所をよみて

歌よも 子も 山乃 山乃

安部抄の巻所をよみては丹、二巻の  
の巻所をよみて

行よも もりり けりや 燕乃 花

艱

一日ハ光 居し ちりり けり

三月月 ぬ一 ね ね ね ね ね ね ね ね

軍余所をよみては丹、二巻の  
の巻所をよみて  
一休禪師の巻所をよみては丹、二巻の  
の巻所をよみて  
定業の巻所をよみては丹、二巻の  
の巻所をよみて

歌よも 是の 一乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

白鳥の巻所をよみては丹、二巻の  
の巻所をよみて

歌よも ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

一巻の巻所をよみては丹、二巻の  
の巻所をよみて

鳥羽の巻所をよみては丹、二巻の  
の巻所をよみて

巻上

巻下



灌佛

灌佛の... 物... 花...

此日... 灌佛の... 新葉...

海... 花... 堂...

大... 花... 葉...

卯花

卯... 丹... 葉...

若葉

若... 葉... 細...

雨... 葉... 葉...

正行... 教訓... の... 画...

楠... 葉... 葉...

先... 師... 墓... 系...

月... 葉... 葉...

目... 玉...

坂... 離... 乃... 男... 葉... 楓...



芥子

前は八月廿八日  
芥子の能くは寝ねの持えんれ

我は...  
...  
...

点...  
...

寝夜

寝ね...  
...

...

睡中夢白の画

...

麦秋

...

...

茄子

...

草

老懐







いぬ湯や洗馬の泥よなぬら

中村 妙子 けだま 芝居見物  
市村 羽衣 けだま 芝居見物  
多振 不仕合 けだま 芝居見物  
人の眼をよらこえし けだま 芝居見物

取代人 羽衣 振 口上 市川 團十郎  
山崎 玄 けだま 清相 人 けだま 芝居見物  
面々 ぬら ぬら ぬら ぬら ぬら ぬら  
後 馬 具 振 けだま 芝居見物

いぬ湯や洗馬の泥よなぬら

サニタニ けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け

けだまの子 布うた けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け  
の 泥 湯 建 を つ け

けだまの子 布うた けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け

去年の けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け  
世の けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け

けだまの子 布うた けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け

けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け

けだまの子 布うた けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け

けだまの子 布うた けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け

けだまの子 布うた けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け

けだまの子 布うた けだま 芝居見物の 泥 湯 建 を つ け



科の春のしるしはさかしのうら  
なほもたし

君の情をさすや年月の鏡と母

花盟女のやまのうら

階くくは君の早月の鏡と母

馬原綿綱の源村田宗彦百回忌

はる花の香をさすはる草乃るも白

七十の夜歸をさすはるも又さすはる  
箱

百代の君の情をさすはるも又さすはる

卯の春のしるしはさかしのうら

法書の應をさすはるも又さすはる

はる馬の香をさすはるも又さすはる

乾籟有感

河原の春のしるしはさかしのうら

五月雨

はるの春のしるしはさかしのうら

はるの春のしるしはさかしのうら

水の流るるの春のしるしはさかしのうら

はるの春のしるしはさかしのうら  
心あはれ  
はるの春のしるしはさかしのうら



巻十  
三十一

草菴閑

い〜〜の〜〜

之韻

〜〜の〜〜

拾見稿

〜〜の〜〜

新取の〜

〜〜の〜〜

武城下

入梅の〜

垣牛

〜〜の〜

苔花

〜〜の〜

霜百回忌取紙

〜〜の〜

十三回

〜〜の〜

世の中か世を〜

の集止

三十一



遊山鬼丸亭

子乃くまの裾田乃蛇牛

中京の隈古海の趾

陸尺のほくりに於 田竹取

詠世言を納

里くく子乃分つや田はな

醉月亭

破中くく田をくし月の意

三嶋法樂 多神大山祇命

魚多れ川もさくはは田は

舞終の終

万倍よ流の糸乃む田くれ

藤花 蒲

清水白鹿亭乃ち流を橋川より

もおもや白ををんれを橋川

田中白鹿亭藤花の初積

藤乃花如く川寺に於て水鏡

金屋堂子の許よりちりて地極一

夫の白鹿亭を以て  
藤と知りて其徳と  
すべし



是より先の事... 紀新... 人... 多...

此の... 記...

堂

此の... 記...

此の... 記...

藤澤山古牌寫

南無阿彌陀佛自應永二十三年十月六日 兵乱至同二十四年於郡卿官負將士兵卒等 軍陳相持亡身者若干且蹈水火横死者不 可枚舉於是為其孤追福建塔於佛前願以 功德尽出輪回生淨土

此の... 記...

後府清あり

此の... 記...

掛川の城乃... 記...



堂の架橋あきくれを旭山  
子供あしあし

おろろよそ道や。團扇の  
竹をさしきれ竹の伸る

蝙蝠

鳩々天窓もいつく古けら

蚊 蠅 蚤

身じり子漢なき 帷の四隅に

夏虫は入火

帷の。帯獨り舟く入坂の好

又母は田町新宅

帷は織入枕時斗や牛車

桂麩止宿

帷くも新し帷は白くれ

津玉神戸の海。魯測を道す

帷つるく。須磨の海を

えせは羽儀糸

朝夕は帷も香けり羽衣



伍しものりまじりいなるなる

つしふとよよなるの楓打

湖ののふは秋乃なるを臣職  
此は尺小登人の生ひなる  
乃葉落花しりしり  
ゆしりしは隠れしりしり  
を捕しりしりしりしり  
のふはなるよあしりしり  
はしりしりしりしりしり  
あはしりしりしりしり

雲し志し盗人の捕りぬる

夏 雑多

藤原や登りし志しりしり

よし切や刀種名河面何十里

標中

葉しりしりしりしりしり

水勢清りしりしりしり

木母をりしりしりしり

蘭因州しりしりしりしり

並しりしりしりしりしり  
一澤しりしりしりしり  
野しりしりしりしりしり

形たりしりしりしりしり



飛波山

空の鳥さうもくねむく飛波山

夏木立

唯よみある寺や夏木立  
やみ替はるのむらさき

松竹寺

古き木一樹くしるありや

大津新大原社と納

夏夜やも是れ川松の月

羞破や月さらしよくはるし

夏草

なつ草の種多の灯をたのむ

華山道るおらら山家屋の回跡見ゆや  
江のりより持舟河を流るて修而修は  
野乃宅所七平地し畑中よもる石は

夏くはるやもくねむく三の鱗

向くはる守山あり眼よ事さるる  
孔子語今大和のあて八幡八幡  
社社さる山のくちりて好む  
願成社寺のよき言院あり堂は  
大日如來山家所守る余のまより古柳







魂もも思ふ我をよすれは

時柳亭の菊をよすれはよきと云ふ  
凡そよすれはよきと云ふ

夏菊の山崎の山崎の山崎

山崎の山崎の山崎の山崎  
山崎の山崎の山崎の山崎

たぐふも花も雪浪花

骨髄の山崎の山崎の山崎

蓮

蓮乃花也やの山崎の山崎

心蓮の山崎の山崎の山崎

蓮花の山崎の山崎の山崎

蓮花の山崎の山崎の山崎

暮去の山崎の山崎の山崎

採蓮の山崎の山崎の山崎

採蓮の山崎の山崎の山崎

花の山崎の山崎の山崎

物個

五羽の山崎の山崎の山崎

蓮の山崎の山崎の山崎



蝉

い祿くと蝉あつとふり柳成

強肩乃た更しつゝを語

蟬の音や語もさういふまゝ

清水

緑くま山陰名泉の事

山嶽の如くわつそ井苔はあ

み乃解茶のついでに

清水自然の記をたぬ

夏つけや何となく水の音

あゝ音を清くよこして

瓜

瓜喰く時茶碗のこぼれ

唐中の有菟より瓜く

汁のよみ山室はくらく瓜

氷室 一折酒 鮓

すしややゆの音もはの

よの音よむひり後人



六月新の赤水船

ほろの好きし旅のしるし乃水室の  
下より安し故より好ふ二指

君魚亭

赤水や石ころの夏水

書林西村海客より夏水を送る

汗ぬらふしは旅使乃美流石

上総守の二燈塔と山吹花

月山は杖とまきとて夏水

富士乃雪入る造りん一板酒

室の相子船の西しやむら酒

まの穴の獲りておし

此宿乃新生石や鮎の歴

暑 二言峰

あ國お徳

暑もあや孔明を新れも

久しとたつら日何しやむら

七面山



くまのこゝろやしらべ七西

遊山留別

あゝまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

夕立

夕立やしらべのまゝのまゝのまゝのまゝ  
ゆきしらべのまゝのまゝのまゝのまゝ  
夕立やしらべのまゝのまゝのまゝのまゝ  
夕立やしらべのまゝのまゝのまゝのまゝ

其角あゝ乃画賛

ゆきしらべのまゝのまゝのまゝのまゝ

忠子

松尾家飛羽のまゝのまゝのまゝ

忠子やしらべのまゝのまゝのまゝのまゝ

富子

山子やしらべのまゝのまゝのまゝのまゝ

十路のまゝのまゝのまゝのまゝ

山子やしらべのまゝのまゝのまゝのまゝ

山子やしらべのまゝのまゝのまゝのまゝ



竹夫人

西のよ人ほくきん竹婦人

石燕う嬉し川きりくきん

探すく画くきん竹婦人

空の夏乃足投うきん竹婦人

有卦よ入りしひのふたやま七と画くきん

うけく竹丹や七有乃きん竹婦人

夏月

亦男子おを色く夏の日おふ

布袋月え後

白の月一味よしし空の月

お臨柳市よ色

秋のお乃ひしし夏は月

守山亭

飯時のた子美しん竹の月

籬

夕風や夕きもあはれ小籬賣

ゆの籬や臨きりけちきり乃雨



芝浦早沙之り

地より由鴻之るりしりや芝者

夏雜

癸卯の夏

九月より如き事四月より重なる如

或人より之を祝

此宿や多く何事しつゝ花之本

目録に夏集名を

西日を雪がくくさる五月

扇面不中

夕影乃如や門田の扇不中

画師之溪甲陽より成る

夏虫一し甲如あ。橋の絵筆より

今戸より舟

夏さけく祝洗りんをみり川

憐れ歌

宵くくや梅千乃笛も吟吟

遠江志多岐の磯や余岡浦見たりや一日



清くは人の亭よりありて白砂に  
 長谷川を仰てかこもる元より乾坤  
 四隅の宇を中なるれ神松の雲層も  
 われは壁り造化の事さ成けく是と  
 春のうらまはるる妻の事完全持より記  
 雲の積層は是を御子細くも松の傍ハ  
 白くも何れとくつらるる水指の秋も  
 涼しくも人の人なり此神  
 岩上よりともお行なすましく風波  
 下流の船のえんけりや何れ  
 諸れえ是も又宇宙之本の事致  
 なるのけりやのせり成はるるを  
 志すなり

余月の浦之風炉は伊良慮崎

坐堂亭

松風より夏なきに谷の波うれ

大斗三回忌

併もあきけりぬ

全十三回忌

去乃ぬし我復癒よる金に

八丈崎為朝明神宇姥

爰引りちりも神の弓法治

響彦彦

おと月越きく水あり義柳



王戎

昨よりいそし味も 菓子も

時多忘

多しを夢招きよあまの

恙もわしとの重なる

冷飯も夏大根入り

う飯くし老のやまや

夏よりも下の子も

朝の風情を

古地は祇園を中や日傘

六月十日の時

茶よ酒を月よ

官蔵宛来

六月の月を

まゝの

強自増う南水二徳り

嘉祥院



西條の神社

夏川や書も持て扇橋

朝方のあまのついでに梅の山橋をうら  
推してのついでに梅の山橋をうら

夏みりくふたつとあつと照威子

山崎の人の画

去はしつと山崎のついでに

抱つてついでに

西田の因を

水も月や人の御殿へ大井川

先師史書翁三十二回忌像前

繪巻のついでに

西平のついでに

六月のついでに

快林寺

筑前の人

大和路

あつと月や田のついでに

或はつと



波をよこするに復けり晒す所  
六月も少なきもあつた二井の境  
何となく秋風ちうた柳の影

納涼

草むすべり柳の影に  
ゆつ涼蒸す風を覚ゆるは

早稲の葉店  
物なりを候ふ時

着る涼錦のおもひり川涼

加田夜泊

解もゆるさうけをいふ父涼

二十四孝  
加田真兄す

休してしと樹もけりよ下涼

普化賛

明頭素明  
既打暗頭素明  
既打四方八面  
来旋風歩

盤のよすりぬる父涼  
を付乃譽ふ小巻る素  
一長屋盗人あつた  
盗人の納涼



初らたよ物見かゝやなま

喜洲の公子雪川君海川程阿孫の寮  
工海川のよき侍也

くろや此海を水電よ下とま  
涼しきや古也あ奴婦よ初らた

華山く壽保子より此川の客舎  
たきして花屋なきつるおのこき源で  
中くくめく人はぬま

るお屋とたつて涼し田も細色

壽保子の屋とよまの池あり自ら  
正歩余りけ方よ中あ稽くして替目

乃付あれた徳まよと極橋たして字はの  
川口もぬり何とる六組樹打かみ  
行みくしれせ山扇林おし富生屋を  
付く寢虎竟一の納涼乃地くく今と  
らぬ屋もあぬよ楽まの河もけくそ  
初のまよと纏をまよと極樹よ如橋  
をさけくおやあ焚の風花ありお十八  
の健士を撰く義之の常楽亭の曲水よお  
歌く七歩の石をさけく極古橋より  
あをけくあ極橋よもり時治垂る鳴鐘  
をのまよとひり歌をさけく道むぬる廟  
そのまよとひり白り十とる者  
あを器名を極くむけ真言あ風夷の人  
もりかまの踏くのくをけく先  
老なりまよとあをさけくぬるあれ八倍  
まぬりありあおのけく目  
せぬふとえたりし



涼しきや、新さなはくしの曲る水

巴水亭の冬合意ハ昔新崎の徳もかきしるの原もたけしき多きをまきしりみぬる

そよよししあましる雨も久しきる魚

滝山石動

白瀬の世の年志のへく傍涼し

棲風舎の床よりしらきぬくをうけてるをひひしりしりぬる

ふきとるあまのるよ松涼し

桃壺亭

庭涼しき水も力も入ん

五釜一具頭四睡 豊干

海山とつ味よすりしる。新

信長のお世七才威りて新發四十余の文を記す

又見よるも天宮も急し友涼し

出羽浮嶋

涼しきと運つる水山のけり度

筑前春江にけり路よりしる

すしきや先世の生の松



唐糸

あしきや水よ心のこころ

唐糸唐の古の唐糸

涼しきや何を活しても

涼しきや何を活しても 唐糸唐の古の唐糸

すしきやかたきく松二木

月お布袋名額

すし乃囊ほけけ月涼し

しきや客は井の常

師抜

甲辰六月毎日角田川の正後孫丹々  
はかりしよりの船もきき之阿路よ  
日ゆくりり

此唐糸ももあきく川社

知事のお連く大川のききあは

魚をききあき遠しのききの編り

みしきよ乃心よ知事あきき稲川



新聞紙与濃尾の  
ち震とんを征ら

火の焼れ水に溺る、憐れきハ  
聞もうの、此舟の終りハ

能師を来りて存よしうて  
うれの悟道と摩ろ

云れハあるあるハ、そら舟と知り  
あつらん、居残あり、此ハ世の別れハ

其紫部、星尾村竹徒某うあつ供  
いもあ、此舟とんて

夕暮の星とさう、  
夕人、月山の鏡と水層のわさともハ

月山の穠書えんあり、居居振

右、星尾村、掛川氏に、穠世と  
予、此舟、舞よとんて

夕都、と供よ、隠る、穠、乾ハ  
星尾の峯、と、臨と、残

山に月、順、西



